

フランツ・リストと聖エリザベト －第1部、フランツ・リスト、その7－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 粟 傷志・高田 昌実・上村 章
鹿児島大学 名誉教授 田島 紘己
加治木温泉病院 納 光弘
鹿児島市 夏越 祥次
粟 隆志

[はじめに]

現代社会には、多種多様の音楽媒体があるようだ。

然し私の場合は、当初よりLPである。そして、それを補うためのCDがある。

自分の選んだ再生装置で、これまで収集したLPを聴く時が至福の時である。

更に、LPに演奏者のサインがあれば、もっとよい。小さい針がレコードの溝をトレースする事により音が蘇える、その目に見える単

純さが、何より好ましい。

本稿では、ショパンのアイドルと言われるバッハについても言及する。

バッハ音楽の蘇演は、音楽史の偉業と見做されている（図57）。

[4] ジョルジュ・サンド

（5）ジョルジュと破局後のショパン、晩年、つづき

1848年2月、ショパンはサル・プレイエルで演奏会を開いたが、これがパリで最後の公開演奏会となった。その6日後の2月22日に、



図57 バッハの無伴奏チェロ組曲
(チェロ演奏の大家)

上：カザルスは、バッハの名曲を蘇らせた
(LP, Dacapo IC3LP137, 1936-39録音)

下左：ミッシャ・マイスキー
(CD: D. Gramophon, 415416-2 P 1985)

下右：ロストロポーヴィッチ
(CD: EMI TOCE-8641/42, P 1992)



図58 ジェーン・スターリング
スコットランドのピアノの弟子
晩年のショパンを経済的に支えた
(ドゥヴェリア画, Wikipedia)

仮2月革命が起こったからである。

今回もショパンは、結果的には革命を避け、イギリスに逃れる事となる。

ジョルジュと別れた今、ショパンは、ロンドン永住も考えていた。

渡英には、英國（スコットランド）の美貌で大資産家のピアノの弟子、ジェーン・スタークリング（1804 - 59）が尽力した（図58）。ショパンは彼女には、44年に「2つのノクターン」を献呈している。

4月20日にショパンは、ロンドンに到着した。ここで、ジェーンとその姉がショパンを迎えた。

当時、ロンドンには、大陸から多くの芸術家が逃れて来ていた。

ロンドンでは、サザーランド侯爵夫人の好意で、侯爵邸でヴィクトリア女王、アルバート殿下らの御前での演奏会も開かれた。

ショパン最後の晴れの舞台であった。

この時の事を、ショパンは女王が二度、言葉をかけてくれた事、殿下がピアノの傍へ来た事を自慢している。

生涯にショパンは、約30回の公開演奏会を開いたと言われるが、この地での演奏会は頻回（9回）で、彼の意気込みが感じられる。

一方リストは、1847年のウクライナのエリザベトグラードの最後の演奏会までの演奏旅行の8年間に、約千回の演奏会でスーパースターとして大活躍したことにとどまらず、自身の到達した演奏を世間に知らしめたが、それは、ピアノ音楽の魅力を世界に広めると共に、他の作曲家の他のジャンルの作品にも光を当てる事ともなった。これは、音楽史上の偉業と言えよう。

この演奏旅行中の47年、現在のウクライナのキーウの演奏会で出会ったカロリーネと共に、48年よりヴァイマルに定住し、宫廷楽長、指揮者、作曲家として、大きく飛躍する

事になる。

ショパンは、英國では王侯・貴族など上流階級のサロンでの演奏会は、仕事と割り切って行ったが、大衆相手のオーケストラとの共演依頼は断った。

ベートーヴェン、モーツアルト、メンデルスゾーンの曲などの演奏依頼が予想され、それが嫌だったからだ。

ただ彼は、断わる理由に、オーケストラの練習不足をあげている。然し実際問題、突然それらの曲の演奏を依頼されても、技術的にも体力的にも、大衆を満足させる演奏ができない事を悟っていたのだろう。

何くれと世話をやくジェーンなどにも、親切だが退屈でわずらわしく感じ、音楽的知識の乏しい英國女性の反応にもいらだち、またロンドンやスコットランドの気候に不平、不満を訴えつづけた。

もともとショパンは、レッスンでも大声で怒なったり、癪しゃくを爆発させたと言われる。

サンドは「ショパンは怒ると怖かった」と述べている。神経質で短気だったと言う。

演奏会はおろか、上流階級の婦女子相手のレッスンに、将来の期待が持てないと感じたショパンは、次に作曲に活路を見出そうとしたが、英國で彼の為に用意されたエラール、プレイヤール、ブロードウッドのピアノを前にして、残念な事に、新しい作品を生みだす事はできなかった。

文学や他分野の芸術家からのインスピレーションを受け入れず、新しい事へのチャレンジ精神を持たなかったショパン、若い頃の祖国の民族音楽の記憶と、自己の天賦の才のみを頼りのショパンの作曲の泉は、既に枯渇していたのである。

多くの作曲家が若くして死んだが（モーツアルト35、シューベルト31、ベッリーニ34、メ

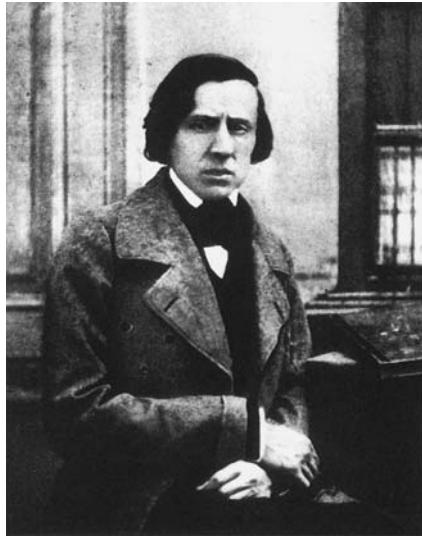


図59 ショパンの唯一の写真
ロンドンからパリに戻った、1849年に撮影された。
(音楽の手帖、ショパン、青土社、1983)

ンデルスゾーン³⁸) 皆、最後まで比較的旺盛な創造力を保持していた。

日本では、作曲家はもともと少ないが、ショパン同様、結核で早世した作家は多かった。然し、彼らの創作意欲は決して劣えていなかつた(国木田独歩³⁶、樋口一葉²⁴、正岡子規³⁴、高山樗牛³¹、石川啄木²⁶)。

ロンドンで活路を見出そうとした目論見は潰え、その気候にも苦しめられたショパンは、12月にパリに舞い戻った。

図59は、パリに着いてからの、彼の唯一の写真と言われる。病気とは言え、37歳とは思えない、若さの感じられない風貌である。

パリでの生活費は、ショパンの知らない所での、オブレスコフ公爵夫人の援助や、ジェーン・スターーリングから贈られた2万5千フランで賄われた。

翌49年6月21日、喀血したショパンは、遂にワルシャワの姉ルドヴィカに病気の事を連絡。

自分は、一文無しなので、旅費は借金しても来るよう頼んでいる。



図60 ショパンの枕元で歌うデルフィーヌ・ポトツカ伯爵夫人 (1849年10月15日)
(音楽の手帖、ショパン、青土社、1983)

金は、回復したら、演奏会を開けば簡単に返せるとか、回復したら故郷に帰る事などをほのめかしながら。

8月9日、姉夫婦が子供連れてパリに到着。その後も状態は増え悪化した。

10月15日には、デルフィーヌ・ポトツカが滞在先のニースから駆け付けた。

ショパンの希望で、デルフィーヌは枕元で、ストラディルの「聖母讃歌」とマルチエルロの「讃美歌」を歌った(図60)。

ショパンも本望だったろう。

さて、ジョルジュとショパンが、マジョルカ島から戻ったのは1839年で、その後二人は共に暮らしたが、1840年11月19日にショパンがデルフィーヌにあてた長文の手紙がある。

「サンドとの恋はマジョルカ島で終った。……あなたはサンド以上です。……僕はサンドには、魂を開かなかった。……サンドは異国人で僕を理解しなかった(ジョルジュは仏人、デルフィーヌはポーランド人)」と、デルフィーヌと縫りをもどそうとしていたのだ。裏ではデルフィーヌに言い寄りながら、その後、サンドと1847年まで共に過した。

[隨筆・その他]

1849年10月17日、死亡、39歳。

10月30日の葬儀は、モーツアルトの「レクイエム」の演奏などで盛大に挙行された。

遺骸は、生前の希望でパリのペール・ラシェーズ墓地のベッリーニの隣、ケルビーニの墓との間に埋葬された。

心臓は黄金の壺に入れて、祖国のワルシャワの聖十字教会に安置された。

葬儀費用、ルドヴィカの帰国費用などは、散逸を防ぐために、ショパンの遺品のほぼ全てを、競売で競り落したジェーン・スターリングの支払金で賄われた。

この年、カルクブレンナーは、パリで流行したコレラで死亡。革命で追われる身となつたヴァーグナーは、ドレスデンから逃れ、ヴァ

イマールでリストに匿われた後、チューリッヒに亡命した。メンデルスゾーン、ベッリーニは既に死亡している。

(付録) ベッリーニとケルビーニ

ベッリーニ（1801-35）は、ベルカント・オペラの最高傑作「ノルマ」「夢遊病の女」「清教徒」などで知られる。前記の「ヘクサメロン」は「清教徒」の編曲。リストの編曲「ノルマの回想」などは、演奏効果が非常に高い。マリア・カラスは、これらの作品を繰り返し全曲録音している（ノルマ8回）。

図61は、1950年代のカラスのLP。

図62は、カラス以後の歴史的名演のLPのパンフレット。「清教徒」のババロッティ、「ノルマ」のレナータ・スコットのサイン入り。カラスの初期プレスのLPや、歴史的演



図61 マリア・カラスの初期LP

左上：ヴォットー指揮「夢遊病の女」、スカラ座、1957
右上：セラフィン指揮「清教徒」、スカラ座、1953
左下：ピッコ指揮「清教徒」、メキシコ市、1952
右下：ガイ指揮「ノルマ」、コヴェント・ガーデン、1952



図62 マリア・カラス以後のベッリーニのオペラの名演の一部（パンフレット）

（上：LP、ボニング指揮「清教徒」
コヴェント・ガーデン、1973、ババロッティ）
（下：LP、レヴァイン指揮「ノルマ」
コヴェント・ガーデン、1979、レナータ・スコット）

奏のオリジナル・プレスのLPは貴重。

ケルビーニ（1760–1842）は、高名な作曲家、音楽教師である。彼の著作「対位法とフーガ講座」は、すぐれた教科書である。彼がルイ16世を悼んで作曲した「レクイエム」は、ベートーヴェン、シューマン、ビューローらに絶賛された。

1823年、パリに出てきたリストは、パリ音楽院に入学を希望したが、院長のケルビーニに、外国人という理由で拒否された。

彼のオペラ「メデア」は、カラスが6回の全曲録音を残した事で、今日よく知られている。ショパンの、4分弱の遺作「フーガ」は、ケルビーニの主題によるもので、バッハとは無関係である。

（付録）バッハとショパン、メンデルスゾーン、リスト、そしてカザルス

ショパンのアイドルは、モーツアルトとバッハだといわれ、ショパンの伝記でも度々強調されている。ここでは、メンデルスゾーン、リストのバッハとの係りについても述べる。

・ヨハン・セバスチャン・バッハ（1685–1750、65歳）の死後20年を経た1770年にベートーヴェンが生まれた。

ベートーヴェンは、バッハを「小川ではなく大海」と言った。

バッハは、彼以前の音楽を貪欲に吸収し、その音楽は西欧音楽の一つの大きな源流となった。

その音楽は、バッハの一派それに、多くの音楽家に連綿と引き継がれている。

彼は、カンタータ、ミサ曲、受難曲、オラトリオ他、膨大な作品を残したが、鍵盤楽器でも、オルガン曲、クラヴィーア曲、カノンなどの対位法的作品の多くを残した。

バッハの鍵盤楽器音楽は、その後に続く、

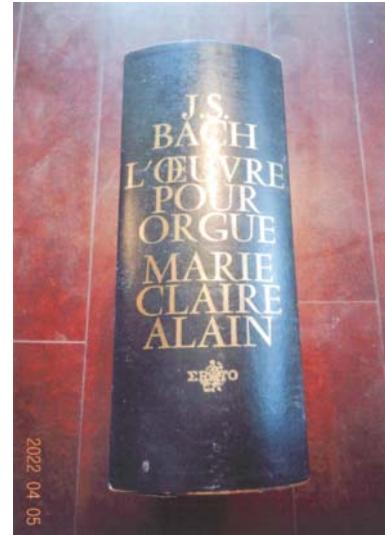


図63 マリー・クレール・アランのバッハ・オルガン曲全集
バッハのオルガン曲は膨大。当時LPは貴重で、木箱に収められている。黄金色のオーラが漂う。

ピアノやオルガン音楽を理解する上で、重要なである。

もちろん、バッハの全作品が重要である事は言うまでもない。

オルガン作品全集としては、私共の若い頃は、16歳で失明に至ったヘルムート・ヴァルヒヤが挙げられる。私共は、実際には聴いてはいないが、心情的に彼の偉業に尊敬の念を抱かずには、いられなかった。

私の全曲版は、マリー・クレール・アランのもので、LPの貴重な時代を反映してか、立派な木箱に入り、サイン入りのものである（図63）。

クラヴィーア曲集は、多分全曲録音を目差していたグレン・グールドが、その多くを録音している（図64）。

ショパンについて語られるのは、バッハの「平均率クラヴィーア曲集」であるので若干の説明を加える（以後「平均率」と略す）。

ハンス・フォン・ビューローは、「平均率」を旧約聖書、ベートーヴェンの「32曲のPS

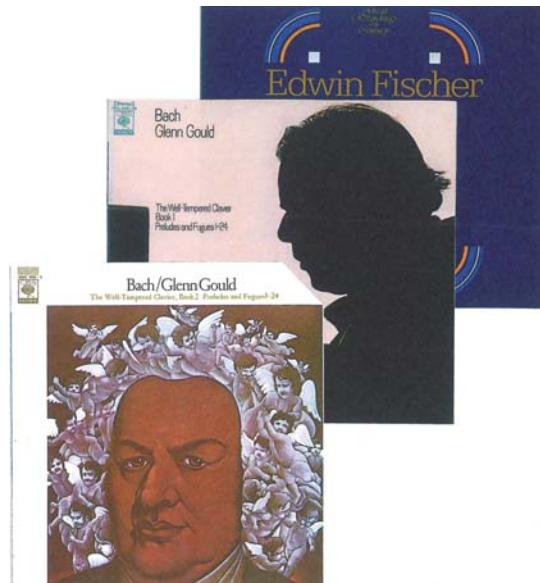


図64 バッハの平均率クレヴィーア曲集
手前よりグールドの第2巻、第1巻、そして、エドヴィン・フィッシャーのLP。

(LP, CBS・SONY, 40AC1594/5, 1967-70)
(LP, CBS・SONY, SOCL1098/99, 1967-70)
(LP, EMI, GR70028/29, 1933-34録音)

ナタ」を新約聖書』に準えた。

バッハ以後の音楽家は皆、この曲集の重要性を認識していた。

平均率：1オクターブ離れた2音の振動比は、1対2である。そのオクターブを12等分する整律法が、12平均律である。

これにより、24の調を全て用いる事ができる。

この平均率では、音名別の数は12であるが、各々に長調と短調があるので、24調という事になる。

「平均率」は、第1巻（1722）、20年後に第2巻（1742）が完成した。

各巻は、全ての調（長短24調）からなる、24曲の「プレリュード（前奏曲）とフーガ」で構成される。2巻で48曲の大きい曲集である。

その配列は、ハ長調から始まり、半音づつ高く主音を取り、長調と短調を交互に配している。

従って、ハ長調　ハ短調　嬰ハ長調　嬰ハ

短調　二長調　二短調……　口長調　口短調となる。非常に分り易い。

バッハは、この曲集を「音楽を勉強する若者に役立つように、既にこれを身につけた人には、楽しみのために」と書いた。

又、未完に終った「フーガの技法」は、対位法的変奏曲で構成され、創造力に富み、至高の位置に到達している。

この作品でバッハは、三重フーガを書き進める中、自分の名前B・A・C・Hの主題を入れた所で作曲を止めた。

モーツアルトは、スヴィーテン男爵の依頼で、「平均率」第2巻の5つのフーガを弦楽四重奏曲に編曲、ベートーヴェンは、バッハの孫弟子のネーフェに「平均率」を学んだ。

・パブロ・カザルス（1876-1973）が、バルセロナの楽器店で、バッハの「無伴奏チェロ組曲（6曲）」の楽譜を手にしたのは、1890年であり、公開演奏をしたのは、1904年のことである。

この名曲の復活の瞬間である。

パブロは、1936-39年にかけて全6曲を録音した（図57）。音楽史上に残る名演である。

以来、この曲集は、チェロの最も重要なレパートリーとなり、多くのチェリストにより演奏されるようになった。

図57に、チェロの名手、ロストロポーヴィチとミッシャ・マイスキの全曲集も加えた。

カザルスは、反フランコ独裁政権、反ファシズムの姿勢を貫き、またバッハ研究の第一人者で、バッハ演奏の権威だったシュヴァイツァーと共に、核実験禁止運動に参加した。

シュヴァイツァーは、欧米の演奏会で稼いだ金を、アフリカのランバレネでの病院建設、医療に注ぎ込み、「密林の聖者」と呼ばれた。私達もLPで1930年代の彼のバッハを聴いたものである。

マリア・カラスが、ベルカント・オペラを復活させたように、バッハの音楽を復活させる事は、音楽史上の偉業と見做される。

・ショパンのアイドルはバッハであったと言われる。彼は、バッハの「平均率」を常に手元に置き研究していたとか、バッハの作品の校訂をしたとも言われる。

ショパンの作品とバッハの関連に関しては、ショパンの24曲の「前奏曲集」の長短24調が、バッハの「平均率」にインスピレーションを得たと言われる（彼の伝記によれば）。

また、その第1番が、「平均率」の第1番の前奏曲と同じ、ハ長調で始まる事、ショパンの前奏曲を非常に遅いテンポで演奏すれば、「平均率」の第1番の前奏曲と非常に似ていると強調する者もいるが、こんな事は全く問題にならない。

前奏曲集は、独創性に富んだ珠玉の作品であり、バッハとは、無関係のショパン独自のものである。ショパンは、他の作曲家や、文学や宗教、その他の芸術を受け入れる事は、全くと言っていい程に無かった。バッハに対しても、同様である。

それ故、前奏曲集に於ても「平均率」に見られる、前奏曲に続くフーガを書かなかつし、個性を際だたせるために、24調の配列を「平均率」とは、完全に変更している。

また、ショパンは「平均率」を深く研究し、対位法を勉強したとの記載をよく目にする。当然、勉強したに違いない。

然し、対位法、ポリフォニーと和声（法）、および音楽通論、通奏低音、楽器論は、当時の作曲家には必須の基礎知識であり、ショパンに限らず、全ての作曲家が何らかの形で修得している。

リストは、ショパンのように、音楽学校で学ぶ機会は無かったが、ウィーンではサリエ



図65 リストの「ファウスト交響曲」と「ダンテ交響曲」

ショパンと異なり、リストは文学作品から多大のインスピレーションを得て、膨大な作品を創作した。

(CD, サイモン・ラトル指揮, EMI 5552202, 1994)

(CD, ジョゼッペ・シノボリ指揮, D.G. 449137-2, 1996)

(CD, ジョゼッペ・シノボリ指揮, D.G. 457614-2, 1998)

りに、パリでは、オペラ指揮者パエールやライヒャーに作曲に必要な理論を学んでいる。

リストは14歳の時に、作曲家に必須のオペラ「ドン・サンシュ」のパリ初演を果していりし、15歳（1826）で、後に「超絶技巧練習曲集」に発展する「長短両音階を練習するための48曲のピアノ練習曲（実際は12曲しか作曲されなかった）」を作曲している。有能な作曲家は、多分、作曲の基礎理論を学べば、24調で作曲したくなるだろうという事は、想像に難しくない。

ちなみに、ショパンの「前奏曲集」が作曲されたのは、29歳（1839）である。

メンデルスゾーンやリストが、バッハと取り組む姿勢は、ショパンと全く異なる。もちろん文学作品などを音楽に取り組む態度も同様である。次回は、これらに關し述べる（図65）。

（つづく）